

【招待発表】“God, whose hand the Puritan sees”

ピンチョンにおける神の種類

石割 隆喜

発表者は以前、Thomas Pynchon の *Mason & Dixon (MD)* を「見ること」という観点から論じた。主人公である二人の“Star-Gazer”たちはケープタウンで金星の太陽面通過の観測を行うが、ディクスンはこのときの経験を“’Twas seeing . . . our Creator about his Work” (MD 98) と語る。だがこの天空に神を見ることとは対照的に、メイスンとディクスンは地上や海上等天空の下の領域で起こる世俗的出来事が「見えない」。パラノイアを“the view from below” (Hume 66) と定義することができるならば、メイスンとディクスンはイギリス海峡でのフランス艦からの激しい攻撃や“something invisible” (MD 478) が進行中なのではないかとの疑念を抱くことになるアメリカでの境界線測量の任務を「下から眺め」ながら上に誰がいるかは「見えない」のであり、これは天体を「下から眺め」ながら上にいる神が「見える」のとはコントラストをなしている。拙論はこのコントラストに注目するものであったが、これはさらに掘り下げて考えねばならない。なぜなら神は天空だけではなくその下で行われる人間的「見えない」出来事との関わりにおいても言及され、現れているからである。神は天空とその下とは異なる現れ方をしており、この神の異なる現れ方という問題に目を向ける必要がある。

メイスンとディクスンに造物主としての神を見せた天体すなわち自然は計算可能なもの (“perfectly as calculated” [MD 98]) として現れている。なぜ計算可能かといえば、それは“Newton and Kepler” (MD 98) が発見した法則にしたがって天体が運動しているからであるが、ニュートンは自身のその発見を“the argument from providential design” (Jacob 243) に役立つと考えていた。これは目的論的証明とも呼ばれる神の存在証明で、自然のうちに目的であり設計すなわち「デザイン」を認め、そこから「デザイナー（設計者）」としての神の存在を主張するものである。メイスンとディクスンという二人の「自然神学者」に神を見せた自然は「デザイン」や秩序、美や合目的性という特徴をもつのである。

ここで考えなければならないのは、天空の下の「見えない」世俗の出来事との関わりにおいても神が言及され、現れていることである。ベンクーレンがフランスの手に落ちたとわかっていながら出発させられた挙げ句案の定フランス艦から攻撃を受けるという理解不能な出来事について、メイスンは“it must have been intended,— an act of Him so strange, His purposes unknown” (MD 42) と相棒に語る。金星の太陽面通過という天文現象に際してはその栄光をたたえられる神はここで、敵国からの理不尽な攻撃という天の下の人間的出来事に関して「わからない」という当惑を引き起こしている。歴史的に見れば、神は天空より下の人間的領域において本質的に「わからない」ものであったわけではない。古典学者リチャード・ベントリーや聖職者サミュエル・クラークらニュートン主義者たちは「ボイル講演」を通じ、自然のデザインから証明された神はその摂理により人間社会にも秩序を与えていると説いたのである。だがフランス艦からの攻撃により死を間近に経験したメイスンは、その破壊的な人間的出来事に秩序や合目的性を見るところか、それについて「わからない」という反応を示す。ただピンチョンにおいて、地上の人間的出来事は神との関係が「わからない」ものとしてのみ描かれているわけではない。それは「わかる」ものとしても描かれており、そちらにも目を向ける必要がある。

その点で取り上げたいのが *Gravity’s Rainbow (GR)* である。『重力の虹』も神を見ることをめぐる小説であるといえる。さらにその「神を見ること」は世俗と結びついている。ただ『メイスン&ディクスン』と異なり、『重力の虹』において、神と世俗との関係の仕方は「わからない」ものであるどころか、疑問の余地なくはっきりと「わかる」ものとなっている。

まず神を見ることについてだが、主人公タイロン・スロースロップの故郷マサチューセッツ州ミンジボロの会衆派教会墓地に、1766年に亡くなったスロースロップの祖先コンスタント・スロースロップの墓があり、墓石には「雲から現れる神の手」 (“the hand of God emerges from a cloud” [GR 26]) が描かれている。この「神の手」はコンスタントが実際に「この世の雲の間から」ほかならぬ彼を「指差す」のを見たものである (“Constant saw . . . that stone hand pointing out of the secular clouds, pointing directly at him” [GR 27])。アメリカでのスロースロップ家の最初の祖先ウィリアムは、1630年にジョン・ウィンズロップとともにピューリタンの船団のフラッグシップ「アーベラ」に乗って渡ってきた。毛皮商人やコードバン革職人として出発したスロースロップ家はやがて大理石の採掘に従事し、それにより周囲の土地が何マイルにもわたり“necropolis” (GR 27) と化す。手元の資産は森林地に投資され、その“diminishing green reaches”は“toilet paper, banknote stock, newsprint” (GR 28) へと姿を変える。すなわち“the three American truths”である“shit, money, and the Word” (GR 28) を媒介し支える紙に関わる事業を通じ、スロースロップ家は“the wrong way” (GR 556) へと進んだとされるアメリカという国家と運命を共にすることになるのである。

スロースロップ家に関わってきた仕事は破壊であり死と関連している。スロースロップは自分の家が木を切り

倒して金儲けをしてきたことについて“*There’s insanity in my family*” (GR 553) と考える。“[T]he Slothrop Paper Company” (GR 285) はさらなる破壊にも関係している。実業家フーゴー・シュティンネスのために緊急通貨“*Notgeld*” を供給することで第一次世界大戦後のドイツの貨幣経済を麻痺に陥らせた破壊的インフレーションの片棒を担ぐとともに、ヴェルサイユ条約で禁止されていた武器調達のためにヒャルマール・シャハトが考案した“*Mefo bills*” (GR 285) 関連の仕事をも請け負うのである。

『メイスン&ディクスン』において、天空より下の領域で生じる破壊的な人間的出来事は神との関係あるいは神の目的に関して主人公に「わからない」といわせるものであった。『重力の虹』においても、スロースロップ家の家業は自然破壊、ハイパーインフレーション、そして軍拡と関係している。ではこれらスロースロップ家が関わる地上での破壊と死あるいは秩序の崩壊は、彼らが部分的に見る神、すなわち神の手とどう関係しているのか。それらの関係は「わからない」ものなのか。

そうではないということはマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』が教えてくれる。ヴェーバーは禁欲的プロテスタンティズムについての議論をカルヴィニズムとその教義である予定説から始め、まず選ばれたキリスト者がすべきことは「神の栄光を増す」(ヴェーバー 166) ことだけであるから信徒はひたすら世俗内で禁欲的に職業労働に打ち込むことになる論じる。次にヴェーバーはピューリタニズムに焦点を合わせ、この職業観念が「資本主義の発展」(ヴェーバー 339) をもたらしたとする。なぜなら信徒の一人に「利得の機会」が与えられたならば、ピューリタンはそこに「神の働きを見る」(ヴェーバー 310) ——“*God, whose hand the Puritan sees*” (Weber 162)——からである。

ヴェーバーにおいて、世俗内での禁欲的職業労働は「救いを確信しうるための最良の[・・・]手段」(ヴェーバー 360) として神と関係している。すなわち資本主義的な職業労働と神との関係は「わかる」ものとなっている。主人公タイローン・スロースロップ自身が「狂っている」というスロースロップ家の職業労働はこのヴェーバー的観点から読み解くべきものである。ピューリタンは人生のあらゆる出来事のうちに神の“*hand*”を見るとヴェーバーはいい、スロースロップ家の人間もまたことごとく神の手を見てきた。それだけでなく、その神の手はスロースロップ家の人間たちを「指差す」神の手であったが、ヴェーバーによればピューリタンは生活のあらゆる些細な事柄のうちに「神の指をみた」(ヴェーバー 214)。そしてもっとも重要なことは、ヴェーバーにおいて禁欲的職業労働は神の選びを確信するための手段であったが、スロースロップ家の人間にとっても神の選びは重大な意味をもっているということ、ただしスロースロップ家はすでに神に選ばれている、すなわち神に指差されているということである。スロースロップ家の営利活動が関わる世俗内での破壊とその神との関係は、このように彼らを指差して選ぶ神の見える手というかたちであからさまに「わかる」ものとなっているのである。

このように、『重力の虹』において、神を見る者と神は「選び」の関係にあるといえる。『メイスン&ディクスン』においては、天体の運行すなわち自然の背後に見られる神は「デザイナー」であった。「選ぶ」神と「デザインする」神という違いはあるものの、どちらの「見られる」神も「わかる」神となっている。重要なのは、天空に見られる神は「デザイン」や秩序と結びついているのに対し、世俗の資本主義社会と関係する神はそれらとは正反対のものとして結びついているという点である。このようにピンチョンにおいて、神は対極的ともいえるほど異なる現れ方をしている。と同時に、改めて確認するならば、『メイスン&ディクスン』と『重力の虹』において異なる現れ方をする神は、どちらも「見る」ことを通じて認識されるものとなっている。同じように「見る」ことを通じて認識されるがゆえに両者の違いが際立ち、それにより神の異なる現れ方、すなわち神の種類という問題の重要性が指し示されているといっていよう。

引用文献

Hume, Kathryn. “*Mason & Dixon*.” *The Cambridge Companion to Thomas Pynchon*, edited by Inger H. Dalsgaard et al., Cambridge UP, 2012, pp. 59–70.

Jacob, Margaret C. “Christianity and the Newtonian Worldview.” *God and Nature: Historical Essays on the Encounter between Christianity and Science*, edited by David C. Lindberg and Ronald L. Numbers, U of California P, 1986, pp. 238–55.

Pynchon, Thomas. *Gravity’s Rainbow*. Viking Press, 1973.

———. *Mason & Dixon*. Henry Holt, 1997.

Weber, Max. *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*. Translated by Talcott Parsons, 2nd Roxbury ed., Roxbury Publishing, 1998.

石割隆喜「神を見る “Star-Gazer”——*Mason & Dixon* における科学と宗教」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第63巻、2023年、pp. 33–58. OUKA, <https://doi.org/10.18910/91239>.

ヴェーバー、マックス『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波文庫、1989年。